

令和 3 年 5 月 6 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02888

研究課題名(和文)ディクトグロス-Jを効果的に導くフィードバック、および校種間連携シラバスの提案

研究課題名(英文)Effective Feedback in Incorporating Dictogloss-J as a Collaborative Task, and Propose Syllabuses

研究代表者

今井 典子 (Imai, Noriko)

高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・教授

研究者番号：30510292

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の学習環境に適するように工夫したディクトグロス-Jの効果的なフィードバックの方法を、実証研究によって明らかにした。3つの異なる手順でフィードバックを与え、その効果を文法テストの結果から検討した。手順は「教師からの現在完了形の説明」前に、個人活動を行ったグループAとペア活動を行ったグループB、文法説明後にペア活動を行ったグループCであった。結果、グループBとCにおいて、授業前と遅延事後テスト間に統計的な有意差があり、ペアワークによる学びが特定の文法知識の理解により効果的であると明らかになった。つまり、学び合いが、より多くの気づきを引き起こし、定着を促す可能性がある」と示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第二言語習得理論研究で有効性が実証されているdictoglossを基盤に、日本人英語学習者に最適化されたdictogloss-Jを実施する際に、習得上苦手とされる文法項目の一つである現在完了形を取り上げ、理解の促進、および定着させるための効果的なフィードバックの在り方を実証研究し提案している。これまで、dictoglossやlanguageingをキーワードとした実証研究報告はあるが、具体的にどのような手順でフィードバックを行うことがよいのかに関する議論は十分にされていない。ここに本研究の先駆性がある。今回の研究結果から得られた方法の提案は、授業改善の指針となる点で社会的な意義も大きい。

研究成果の概要(英文)： This study focuses on a revised “dictogloss” (Wajnryb, 1990), dictogloss-J (DJ), for use in an EFL context. In order to verify its effectiveness, DJ was conducted with three different groups, which were compared from an individual vs. cooperative work (Groups B and C) perspective, using multiple-choice grammar tests, questionnaires, and reflection sheets. The target structure was the present perfect tense taught to ninth graders. Group A students worked individually throughout the whole procedure, while, at the feedback stage, Group B students were asked to interact collaboratively prior to the teacher’s explanation of the grammar construction. Group C students were asked to interact collaboratively after the teacher’s grammar explanation.

We conclude that collaborative work in pairs led to discussion about the present perfect form, and it is more effective than only individual work. This finding has an important pedagogical implication for the role of collaborative work.

研究分野：第二言語習得理論研究，英語教育学，外国語教授法

キーワード：ディクトグロス ディクトグロス-J フィードバックとしての文法説明 タスク 課題解決型言語活動

1. 研究背景

本研究の基盤であるディクトグロス（以下、dictogloss）は、まとまりのある英文を、メモを取りながら聞き取り、聞き取った英文を学習者同士による協働学習を通して、同様の内容に英語で再構成する言語活動である（Wajnryb, 1990）。聞きとる段階では、内容理解に焦点を置き、再構成の段階では、英文に組み込まれている特定の文法構造を「言語化（*linguaging*, Swain, 2006）」して意識させることで定着を図る活動である。聞き取った内容を再構成する目的と同時に、特定の文法構造を焦点化（*focused*）し、文法構造の定着を同時に図る課題解決型言語活動（タスク）の一種である。課題解決型の言語活動や関連するプロジェクト型言語活動の有効性に関する研究結果は既に明らかにされている（例えば、高島 編著, 2020）。しかしながら、英語を第二言語として習得する（ESL）環境で効果的な dictogloss は4段階（準備段階 20分、聞き取りの段階 5分、再構成 30分、分析と修正 30~45分）の構成で、85分~100分を要する。日本のような英語を外国語として学習する（EFL）環境では、内容や手順、要する時間等を学習者の言語学習状況に適するように創意工夫を施した上での言語活動に改善する必要がある。

2. 研究目的

本研究の目的は、所要時間や内容を簡略化し日本の学習環境に適するように工夫を凝らし、継続的な実践が可能となる日本版 dictogloss である dictogloss-J（以下、DJ）の提案にある。また、「分析と修正」の段階（Stage 4）で特定の文法構造の定着を促す効果的なフィードバックの方法を探ることである。図1は Wajnryb によるオリジナルの dictogloss、図2は本研究が提案する DJ の手順である。

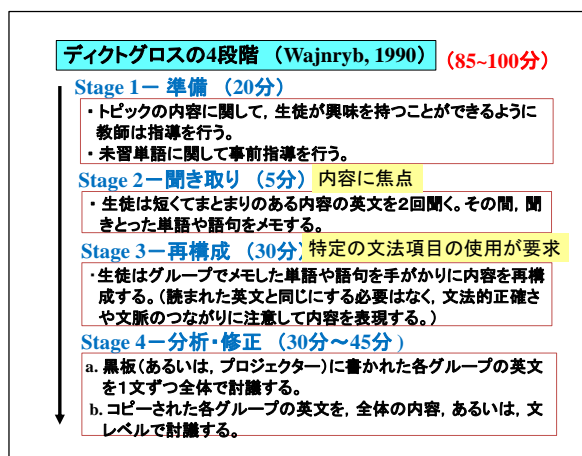


図1 Dictogloss-の手順

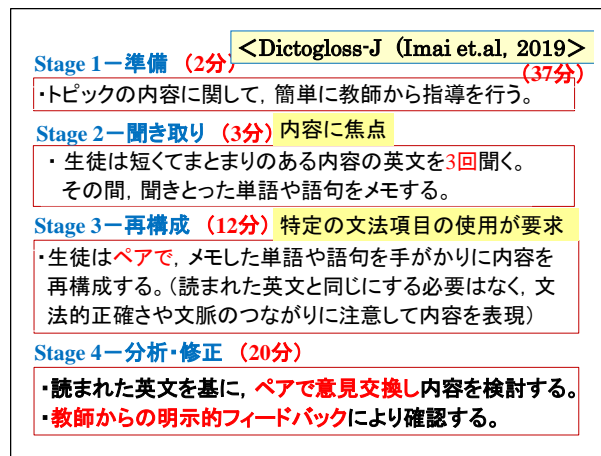


図2 Dictogloss-J の手順

3. 研究方法

研究1年目（2017年度）には、基礎研究と予備調査（Pilot 調査）を行い、結果を踏まえた授業内容とその手順を定め、授業で使用する教材作成や調査用のアンケート項目を確定した。

文法知識の調査には、項目弁別力指数 (DISC) を基に調査のための問題を精査し、2年目である 2018年9月28日（金）から12月3日（月）に中学3年生（179名）を対象に本調査を実施した。DJ の手順は図2、調査デザインは図3に示す。なお、本研究では、DJ を5クラス、3グループに導入した。3グループの違いは、次の①②のように、Stage 3で Group A と Groups B & C に、Stage 4では3グループによってそれぞれ手順は異なっている。

① Group A と Group B & C の違い (図2の Stage 3 参照)

Group A は、作業を全て個人で行い、Group B & C は、作業を全てペアで行う違いがある。

② Group B と Group C の違い (図2の Stage 4 と図4 参照)

最終段階の Stage 4 におけるフィードバックにおいて、教師からの現在完了形に関わる説明が、Group B はペア活動の後に、Group C はペア活動の前になされたところに違いがある。

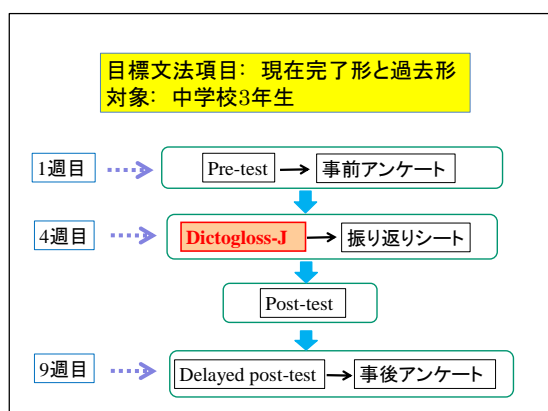


図3 調査のデザイン

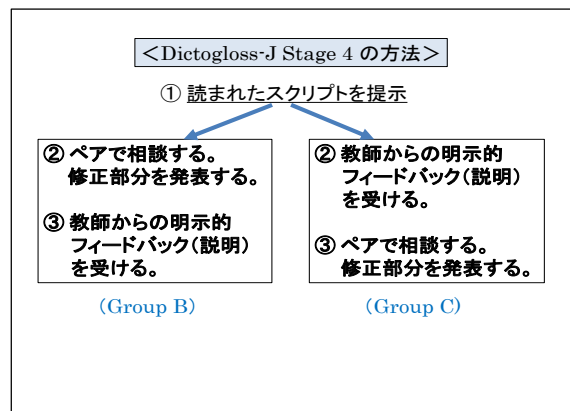


図4 Group B と Group C の違い

学習状況の把握には、3回の文法テスト (pre-test, post-test, delayed post-test) に加え、2回のアンケート調査を行った。各授業の終わりには感想等を記入する「振り返りシート」を配布した。

4. 研究成果

(1) 文法テストの分析方法・結果と考察

問題は計 28 問、調査対象とした文法構造は、「現在完了形」(13 問)、「現在形」(5 問)、「過去形」(6 問)、「過去進行形」(4 問)である。この中で、授業で取り扱った目標文法構造である現在完了形の用法別に、「継続用法」4 問、「経験用法」3 問と「完了用法」6 問を設定した。

DJ の活動の前に、調査までの学習者状況を把握するために「事前テスト (pre-test)」, 調査直後には即時効果を測定するために「事後テスト (post-test)」, 一定の時間を置いての定着度を測定するために「遅延事後テスト (delayed post-test)」を実施した。これらのデータを用いて、DJ を活用した授業の前後で、学習者の英語力の変化を「二要因分散分析 (反復測定)」を用いて分析した。

グループ内で分析した結果、3グループとも1回目の事前テストと3回目の遅延事後テストに統計上の差が見られた。また、学年全体としては、1回目の事前テストと2回目の事後テスト、2回目の事後テストと3回目の遅延事後テスト、1回目の事前テストと3回目の遅延事後テストのいずれにおいても有意差が見られた。グループ間には統計的な有意差はなかった。

次に、目標文法構造である現在完了形の問題 (13 問) のみの結果を見ると、平均値の数値は3グループすべてに上昇が観察された。特に、ペアでの活動を行った、Group B と Group C の2つのグループでは、事前テスト (1回目) と遅延事後テスト (3回目) 間に統計的に5%水準で有意差があった (図5・6 参照)。個人ですべての活動を行った Group A は、平均値は伸びているものの、統計的に有意な向上の差は見られなかった。個人で考え再構成・修正していく学習プロセスよりも、ペアによる学習者同士の協働学習で、英文に仕込まれている特定の文法知識に言及し学びあいや教え合いがあり、より多くの気づきや発見から定着が促されたと考えられる。Swain (2006) の言う languaging である。ま

た、本研究が対象とする文法構造である現在完了形の学年全体の分析結果から、事前テストよりも事後テストの方が、また、事後テストより遅延事後テストで正答率が上昇している。理由として、具体的な場面の中で現在完了形を用いた活動の後、使用場面を考慮した明示的な文法説明を受け、遅延事後テストの後にテキストなどで現在完了形に触れることで知識が整理され、理解が深まり定着に結び付いたと考えられる。授業だけでなく、事前と事後テストで時制に関わる問題に取り組んだことで、自身の知識の不確かさに気づき、遅延事後テストまでの期間、英語の時制に意識を向けたと思われる。

		文法テストの結果				事前調査を基に「項目弁別力指数」を考慮し問題を精選	
＜現在完了形(13問)の問題に絞って＞ (two-way ANOVA)							
Group	Pre		Post		Delayed		p Pre-Delayed
	M	SD	M	SD	M	SD	
A	7.03	2.81	7.58	2.82	7.69	2.89	ns
B	6.58	2.62	6.94	2.89	7.19	2.94	※
C	6.63	2.49	7.21	2.96	7.28	2.83	※

(Group A: 個人で作業、Groups B & C: ペアで協働作業)
 ※ ⇒ 5%水準で有意差あり
 Groups B & C > Group A ⇒ ペアでの作業

図5 文法テストの結果

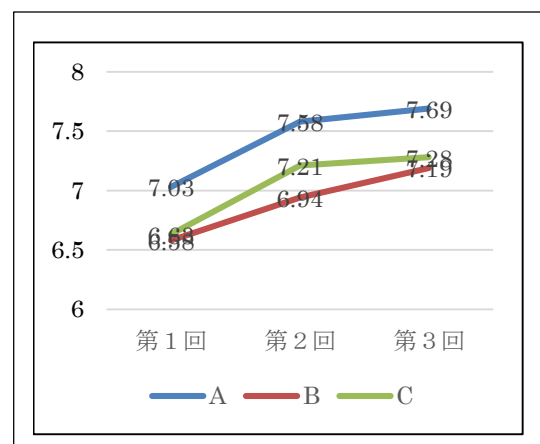


図6 現在完了形(13問)のグループ毎のテスト結果の推移

(2) アンケート調査の結果と考察

DJ を活用した授業の前後に、英語の授業、および英語についての意識調査を、質問紙(Q1~Q9)の9個の質問項目を用いて行った。Q1~Q4, Q6は「英語の授業に対する意識」、Q5とQ7は「生徒の英語の技能に対する自信」、Q8とQ9は「英語の技能に対する意欲」について尋ねている。また、DJは「聞くこと」と「書くこと」の技能統合型の言語活動である。このため、「聞くこと」に関する項目としてQ4とQ5、「書くこと」に関する項目としてQ6とQ7を設定した。以下が質問項目である。

- Q1 英語の授業は好きである。
- Q2 英語の授業で学んでいることは役に立つと思う。
- Q3 英語の授業に積極的に参加している。
- Q4 授業中に英語を聞くことは好きである。
- Q5 授業中に英語を聞いて理解することに自信がある。
- Q6 授業中に英語を書くことは好きである。
- Q7 授業中に英語で書くことに自信がある。
- Q8 英語の授業で学んだことを授業以外で使ってみたい。
- Q9 英語の力をもっとつけたい。

Q1~Q9の項目に関して、「とてもそう思う」「そう思う」「そう思わない」「まったくそう思わない」という回答を、それぞれ4, 3, 2, 1の数値に変換して算出した。これらのデータを用いて、授業の前後で、学習者の意識や考えの変化を「二要因分散分析(反復測定)」を用いて分析した。

アンケート調査から、平均値がいずれの場合も3.4を越えていることから、英語の力をもっとつけたい(Q9)と強く感じていることがわかる(表1参照)。一方で、「英語の技能に対する自信」に関す

る項目 Q5 と Q7 は、他の項目と比較して平均値が低い（最大値は 2.7）。特に、英語を書く技能（Q7）については、いずれのグループでも、自信がない状態であることがわかる（最大値は 2.5）。自己効力感（自信）を向上させるような取り組みが望まれる。授業の様々な場面で、達成感（「やり遂げた感」）や成功体験を経験する活動を意識的に組み込み、できたことから褒める配慮が必要である。

グループごとの調査結果については、授業前と授業後で平均値の数値の変動はあるが、統計的な差は見られなかった。

表1 グループ別アンケート調査結果

Group→ 質問項目↓	A		B		C	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
1	2.86	2.94	2.85	2.92	2.70	2.81
2	3.36	3.64	3.39	3.37	3.40	3.45
3	2.81	3.00	2.87	2.92	2.70	2.79
4	2.86	3.14	2.93	2.83	2.69	2.92
5	2.42	2.72	2.45	2.45	2.25	2.39
6	2.56	2.72	2.75	2.60	2.41	2.53
7	2.31	2.50	2.31	2.18	2.12	2.27
8	2.83	3.11	3.08	3.09	2.82	2.90
9	3.42	3.64	3.49	3.48	3.45	3.53

（補足）表内で平均値が 3.0 を超えている箇所にはピンクで網掛けがされている。

(3) 総括と提言

文法テストの結果から、個人よりもペアによる活動の方が有効であることが明らかとなった。ただ、最後のフィードバック（Stage 4）の段階で、教師からの現在完了形に関わる説明を、ペア活動の後に行う（Group B）場合と前で行う（Group C）場合の違いは観察されなかった。

情意面に関しては、授業を振り返るための質問事項への回答結果や記述コメントから、今回の授業に肯定的に取り組んでいたようである。日々学習している英語を、実践的に使用する機会と文法の必要性を感じる授業内容にすることが、次の学習への意欲につながると考える。今回実施した言語活動の DJ のように、メッセージの授受を重視しながらも、既習の英語知識の活用やその必要性を意識する中で、理解不足を認識し、さらに力をつけたいという気持ちを自ら引き起こす機会を与えることが大切である。

友だち同士で協力して学びあうことの意義を認識し、ペアによる協同作業で与えられた課題を解決していく中でコミュニケーションが自然に生じる。外国語教育を通して、他教科・領域の学習においても協力してさまざまな課題に取り組むことができる言語活動を設定する教員の相違工夫が求められる。

参考文献

高島英幸（編著）（2020）『タスク・プロジェクト型の英語授業』，大修館書店。

Swain, M. (2006). Languaging, agency and collaboration in advanced language proficiency. In H. Byrnes (Ed.), *Advanced language learning: The contribution of Halliday and Vygotsky* (pp.95-108). London: Continuum.

Wajnryb, R. (1990). *Grammar dictation*. Oxford: Oxford University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 今井典子・杉浦理恵・高島英幸	4. 巻 20
2. 論文標題 The Effectiveness and Feasibility of Instructing with Dictogloss-J	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『国際社会文化研究』20号	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 今井典子・杉浦理恵・高島英幸
2. 発表標題 定着を促進し学習意欲を高めるディクトグロス-Jの効果的活用
3. 学会等名 全国英語教育学会（Japan Society of English Language Education: JASELE）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今井典子・杉浦理恵・高島英幸
2. 発表標題 Incorporating Dictogloss-J as a Cooperative Task to Deepen Understanding and Enhance Use of the Present Perfect Tense
3. 学会等名 15th Annual Cam TESOL Conference on English Language Teaching（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今井典子・杉浦理恵・高島英幸
2. 発表標題 Feedback as a Crucial Factor in Maximizing the Efficacy of Dictogloss-J Within the EFL Context
3. 学会等名 2018 APCESP (Asia-Pacific Conference on Education, Social Studies and Psychology)（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	高島 英幸 (Takashima Hideyuki) (40128434)	東京外国語大学・その他部局等・名誉教授 (12603)	
研究 分担者	杉浦 理恵 (Sugiura Rie) (60413738)	東海大学・国際文化学部・教授 (32644)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------